鹿児島県立鶴丸高等学校広報紙

好学愛知
自律敬愛
質実剛健

鶴信

第46・47号　H21．12．28

鹿児島県立鶴丸高等学校
〒890-8502　鹿児島市薬師二丁目1番1号
TEL 099-251-7387 FAX 099-255-3433
http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Tsurumaru/top.html

1月の行事予定

1　月			
1	金	元日	冬季休業日
2	土		
3	日		
4	月	3年センタープレ	
5	火	3年センタープレ	
6	水		
7	木	3年センタープレ	
8	金	**授業開始日**　中掃除　3年センタープレ 第6回職員会議　　学校安全の日	
9	土		
10	日		
11	月	成人の日	
12	火	**1・2年実力考査（1日目）**	
13	水	**1・2年実力考査（2日目）**	
14	木		
15	金		
16	土	センター試験(1日目)　悠学講座⑩	
17	日	センター試験(2日目)	
18	月	全校朝会 センター自己採点	教育相談（平常授業）
19	火	3年特別授業開始	
20	水		
21	木		
22	金	進路判定会	
23	土	1年学研ﾊｲﾚﾍﾞﾙ　　2年進研記述	
24	日	第3回英検一次試験　2年進研記述 一鶴同窓会総会	
25	月	学年朝会	
26	火		
27	水	3年学年会	
28	木		
29	金	第7回職員会議	
30	土	2年駿台東大	
31	日		

初冬雑感

一学年主任　水迫　達郎

秋を実感しないまま冬に入ったと思うと、小春日和の穏やかな日に恵まれる。校門周辺や校庭の銀杏の緑の葉が雨を経るごとに黄金色に色合を変え、雨上がりの青空を背にして美しく輝く。高台の樹も、みずからの存在を誇示するかのように黄葉をまとい、すっくと立っている。

樹を見上げて思うのは、この黄葉は陽の光にどれだけ育まれ、どれだけ焼かれて今の姿を得たのだろうか、ということだ。自らの生を得た場所を自分の生きどころとして、懸命に根を張り枝を伸ばし、風雨にも渇きにも耐え、一日一日を重ねてきた。そのたゆみなき生の本能が、毎年みごとな衣装を披露してくれる。山に行けば山の木々が紅葉し、田の畔を歩けば稲がたわわに実り穂を垂れる。半年の生を証明している姿が誇らしく見える。

萌えだす新緑に自分の希望を重ね合わせた日から半年が過ぎた。部活動に汗し、学校行事に知恵を出し合い、学業に悪戦苦闘しながら確実に樹の幹は大きくなってきた。蓄えるべきエネルギーはそれなりに蓄えられ、さらに大きな樹に育つ可能性が膨らんできた。伸びた枝は少しだけ緑陰をつくることができるようになった。しかし、自分の在り方を見直してみようと促されたときに、君は誇り高き一本の樹としての自分がイメージできるだろうか。

人は、ややもすると小事に埋没し、日々を過ごすのに汲汲として果たすべき役割と義務を怠り、自分の行くべき先も見失う。目先の波を乗り越えるのに精いっぱいで羅針盤を見ることさえ忘れ、どこに向かっているのか見えなくなってしまう。自分のあるべき姿を模索し、大局から物事を判断できる「大人」に近づけているのだろうか、と立ち止まって自分を振り返ってみると、歩むべき道のりはまだまだ遠いと思い知らされる。かつて多くの薩摩の青年たちが、「幼心を去れ」と自らを叱咤激励し、一人前の男子として、混沌とした幕末の世に天命を果たすべく身を奉じた。今の時代なら中学生の年齢にして志を立て、独立した一歩を踏み出した先人たちもその中にいたことをを思うと、その潔さに深く感服する。

かつて、わが鶴丸にもかつての薩摩の青年たち同様に、どっしりとした樹そのものの生き方ができる生徒たちがいた。世間的な流行に流されず、自分の価値観と人間としての生き方を譲らない姿に教師も一目置いていたという。存在感があり、先生たちをして授業がやりにくいと言わしめた生徒たちが何人もいたのである。私が本校で教鞭をとるようになったのは、二十一世紀が間近かになった時期だったが、そのころでも腹をすえて授業の準備をしておかなければ、難しい質問が飛び出してきて授業が立ち往生することが度々あった。生徒総会では鶴丸はどうあるべきか、本気で議論が交わされていたし、ＬＨＲでの討論もＨＲ運営委員を中心にした真摯な意見のやり取りに舌を巻くことも少なくなかった。

今の君たちの中にも、負けず劣らず人間の大きさを見せる生徒がいるが、議論の質をトータルとして比較すると、はなはだ心もとない。個人としても集団としても文字を通した人格の涵養が足りないのが大きな原因ではないかと思う。時の流れに耐える存在になるには、目に見えぬ所でエネルギーを費やすことは絶対なのだ。一人ひとりの鶴丸生が鶴丸としてのアイデンティティーとは何なのか、高い意識を持って日常的に行動してもらいたい。「要望事項」のような表面的な欲求・願望が勢力を大きくしてしまう鶴丸であってはならない。人間としての本質を磨き、真理を探究する理念を大切にし、一人でも多くの生徒が「本物」を探究し、やがてそれらの個人が集団となっていく時、本来の鶴丸の底力が発揮される。そんな鶴丸生たちであってほしい。

今回は難しい話になってしまったが、一人でも多くの者が人間としての自らの在り方を検証し、正面から鶴丸らしさを追求していって欲しい。自分を彫りだす日々をたゆむことなく続けて行きたいと切に願う。

文化講演会

例年、卒業後三十年たった先輩方から在校生へプレゼントされる文化講演会が今年は10月29日（木）に開催された。今年は、国際ビジネス・スポーツアナリストであるタック川本先生による「人生にコールド負けはない『今日から新しい自分になる』」という演題であった。

先生は、今までメジャーリーグの現場やフロントで約二十年間仕事をしてこられ、多くの選手と接する中で感じたことやメジャーリーグ流の選手の育て方などをお話ししてくださった。なかでも「過去と他人は変えられないが未来と自分は変えられる。うまくいかない原因は自分にあると気付いた人間がうまくなる」という言葉は野球だけに限らず示唆に富んだ言葉であった。

三年生を激励する会

11月4日（水）、三年生を激励する会（三激会）が宝山ホールで開かれた。今年は「古典芸能」ということで、江戸落語と上方落語を鑑賞する機会に恵まれた。

明石家さんま氏の師匠としても有名な上方落語界の重鎮・笑福亭松之助師匠の落語や、江戸落語と上方落語の違いについて説明してくださった落語教室、太神楽など本当に楽しく鑑賞することができた。三年生にとっても、日頃の受験勉強の疲れを忘れるよい機会となったようであった。

桜島ロードレース大会

11月13日（金）、一年生にとっては初めての、そして二年生にとっては最後の大会となる桜島ロードレース大会が行われた。

男子は10km、女子は5kmという非常に長い距離に挑む生徒たちはスタート前は緊張した面持ちであったが、心配された降灰の影響もなく天候にも恵まれ、それぞれがそれぞれの目標に向かってスタートを切っていった。

そして、スタートから80分の後にはエントリーした一年生282名、二年生265名の計547名全員が見事にゴールへと帰ってきた。

参加者全員の時間内の完走は、昨年に続き二年連続であったが、それ以前は十数年間達成されることのなかった快挙であり、生徒たちが日頃から一生懸命練習に取り組んできた努力の成果といえるだろう。

新生徒会執行部発足

11月16日(月)に行われた全校朝会での生徒会役員認証式を以て、放生會雄地君率いる平成二十一年度前期生徒会執行部から平成二十一年度後期生徒会執行部に仕事が引き継がれた。新生徒会執行部役員は次の通り。（紙面の都合により会長、副会長のみの紹介とする。）

会　長　繁昌　尚太（25R）
副会長　田中まりの（27R）
副会長　姫木祐太郎（14R）

生徒会を中心に、生徒全員で新しい「鶴丸」を築いていこう。

第26回校内ダンス発表会

保健体育科　上村　早百合

去る12月11日（金）本校体育館において、校内ダンス発表会が開催された。昭和59年に始まったこの発表会も今年で26回を数える恒例行事となり、毎年個性あふれる作品が数多く発表され、大きな盛り上がりを見せている。

この発表会は、教科体育の武道・ダンス選択制授業におけるダンス選択者の学習成果の発表の場として位置づけており、毎年二年生が作品発表を行っている。6月から作品創作に取りかかったものの、授業が週に一時間である上に、体育祭や校内ロードレース大会等学校行事の関係で実質的には限られた少ない時間内での活動となった。どのグループも選曲に苦慮し、なかなか動きづくりに入れない状態が長く続いたが、さすがは鶴丸生、発表会が近づくにつれ集中力はどんどん高まり、見事に作品を完成させ発表会当日を迎えることができた。

軽快なリズムに乗って、若さと元気あふれる動きで、踊り手も観衆も一緒になって盛り上がった作品や、高度なテクニックや構成で観衆を唸らせた作品、わずか三分余りの中に様々な場面の変化があり一つのストーリーを展開していた作品など多彩な内容で大いに楽しむことができた。踊り手一人一人がいきいきと輝いており、ダンスの持つ力、すばらしさをあらためて感じることであった。

また、作品づくりを通して生徒達は互いを励まし合い協力することの大切さ、仲間のすばらしさ、支えてくれた周りの人たちに対する感謝の心など多くのことを学ぶこともできた。この発表会に参加して刺激を受けた一年生が、来年さらに多彩な作品を発表してくれることを期待したい。

最後に、この発表会の運営に当たり協力していただいた放送部、文化祭照明係一年生有志の皆さんをはじめ、多くの方々に心から感謝したい。